旅行満洲

〔昭和9年～昭和19年　継続後誌『観光東亜』、『旅行雑誌』含む〕

【復刻版】全26巻・別冊1

体　裁―B5判・上製・総約13、500頁
揃定価―本体650、000円＋税
刊　行―2016年12月～2019年8月（全9回配本）
別　冊―解説・総目次・索引
解　説―孫 安石・高 媛・清水賢一郎・田島奈都子
推　薦―荒山正彦・西原和海・三橋 勇

昭和戦前期に満洲で刊行された旅行雑誌を復刻。
観光情報のみならず芸術、文芸、歴史記事なども
豊富に掲載された総合文化雑誌である。

不二出版

復刻にあたって

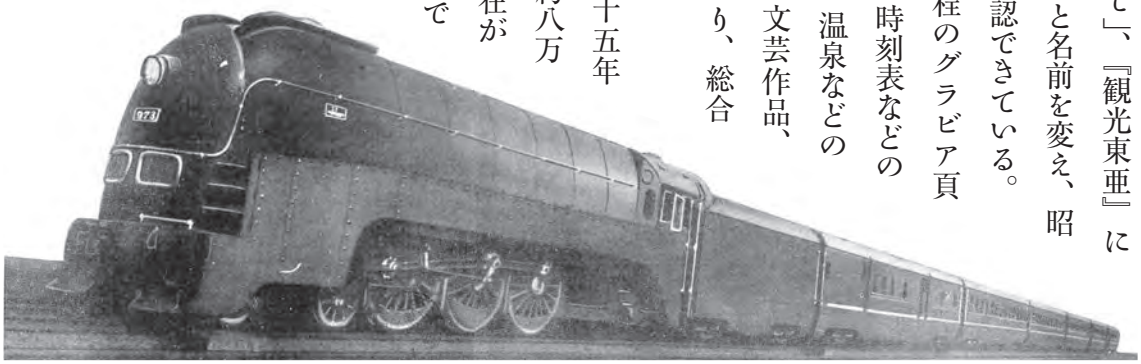
『旅行満洲』は昭和九年六月にジャパン・ツーリスト・ビューローの大連支部より刊行された旅行雑誌である。昭和一三年四月に「東亜大陸を一貫する観光事業への挺身を誓って」、『観光東亜』に改題、その後昭和一八年七月に『旅行雑誌』と名前を変え、昭和一九年八月の第一一巻第八号まで刊行が確認できている。

その内容は多様で、巻頭には毎号一〇頁程のグラビア頁が設けられ、観光地案内、宿泊施設、土産、時刻表などの観光情報はもちろんのこと、スキーや狩猟、温泉などのレジャー情報も豊富である。また、漫画や文芸作品、芸術、歴史に関する記事も多く掲載されており、総合文化雑誌としての側面も強い。

昭和一八年発行の『東亜旅行社満洲支部十五年誌』によると昭和一四年には年間発行総数約八万部とあるが、現在日本国内においてその存在が確認されているのは数ヵ所に限られ、通覧できる機関はない。

創刊号を含む本誌の大部分を復刻刊行し、通覧可能とすることで「満洲」の世相や文化、また戦時下の観光がどのようなものので、どのように変化していったのかを知るための重要資料として供する。

——不二出版



推薦文

「満洲ツーリズム」最後の一〇年間の軌跡

荒山正彦（関西学院大学教授）

『旅行満洲』とその継続後誌『観光東亜』、そして『旅行雑誌』のほぼ全号を、居ながらにして通覧できる日が来るとは思っていなかった。満洲のツーリズムに関心を持ちはじめた一九九〇年代、この一連の雑誌の存在に気づいてはいたが、全号を揃える図書館はなく、同じくジャパン・ツーリスト・ビューローから発行された『観光朝鮮』とその継続後誌『文化朝鮮』と並んで、『旅行満洲』は容易には一覧できない旅行雑誌であった。

一般に「満洲ツーリズム」とは、日露戦争後の一九〇六年頃から一九四〇年代までの約四〇年間の歴史を持つといわれる。たとえば満洲の鉄道旅行案内書は、早くも一九〇九年には発行されており、その後一九三〇年代半ばにかけて継続的に増補と改訂が重ねられた。今回復刻される『旅行満洲』とその継続後誌は、鉄道旅行案内書の増補と改訂がほぼ終熄する一九三〇年代半ば以降の貴重な資料であり、一九三四年から一九四四年という「満洲ツーリズム」最後の一〇年間をカバーしている。そこにはどのような満洲ツーリズムの軌跡がみえるのであろうか。

推薦文

「昭和」と「康徳」のツーリズム

西原和海（文芸評論家）

この雑誌は、満鉄発行の『満洲グラフ』と相並ぶ、満洲国プロパガンダのための、二大メディアの一つであった。その発行所は満洲国内の奉天であったのに、誌名『旅行満洲』の時代から、改題『観光東亜』の末期に至るまで、奥付などの発行年月日には、なぜか「昭和」の年号が使われている。つまりは、日本人によって、日本人観光客だけのために作られた雑誌だったというわけである。

その後、「大東亜戦争」勃発をきっかけとして、奥付には満洲国年号の「康徳」が採られ、誌名も『旅行雑誌』という、何とも味気ないものに変えられてしまう。それまでは「満洲よいとこ」の幻想を振りまくのに熱心だった雑誌が、もはや観光がどうの、ツアーがこうのなどと言っておられない時期になって、ようやく満洲国らしさに還った気配なのである。この「康徳」年号の同誌には、それ以前のナンバーに比べ、満洲国の動態が、よりリアルに反映されているように思われ、興味深い。

反満抗日の間隙をぬって、かつての大陸ツーリズムは、どのように企画され、実施されたのか。政治・経済・文化のうねりを背後に垣間見せながらの、同誌十年あまりの軌跡が、「満洲国とは何であったのか」を問う人たちの必読・必備の文献として、今ここに甦ろうとする……。

推薦文

時代背景がよみがえる満洲国観光事象資料

三橋　勇（秀明大学教授・日本観光学会会長）

一九三四年六月から一九四四年八月に発刊された「ジャパン・ツーリスト・ビューロー（日本国際観光局＝現在のＪＴＢの前身）発行原誌」と継続後誌「観光東亜」「旅行雑誌」から構成された復刻版『旅行満洲』が出版される運びとなった。この書によって紹介される貴重な資料からは、満洲の時代の変遷（戦前から戦中）及び社会的背景と人の観光に対する思いが、時系列をもって明確になってくる。また、満洲からの中国観光だけでなく、内地（日本）や海外の観光地を紹介・案内などをしている処から、ノスタルジイと国際観光への志向性も感じる事ができる。

近年、多様性を持った観光研究が盛んになり必要とされる資料等は、種々様々となってきている。日本国内においては、昭和一〇年代の軍事色が強くなった時代から第二次世界大戦後の経済復興以前迄の一般人の観光旅行は減少し資料に乏しい。その中で、満洲国を中心とした戦前・戦中の日本人の観光活動は、志向や感性から大陸的（欧米型）であったと言える。

この書の資料から満洲（中国を含む）における日本人を対象とした珍しい宿泊施設紹介と価格案内、そして汽車や船の運航時刻表から旅行者が多いことを察する事ができる。また、当時の定期航空路線と運航時刻表は大変興味深いものである。寧ろ、日本国内より人の動きが活発であった満洲の方が、観光活動に関しては先行感があり、近代観光を考察するうえで好材料と思われる。

内容見本

旅行滿洲七月號 目次

第一卷 第一號

寫眞
熱河離宮喇嘛塔……表紙
水と陸（北京と安東）……口繪
乘物のあつまり……口繪
靜かにゆく……口繪
滿洲の夏の旅……平野博三……三
滿鐵線遊覽地への割引券……四
蒙古遊牧者の結婚式……四
城門（畫）……有島生馬……九
城門……九
七月の滿洲……川村寅雄……三
ティップ漫談……三
租借權承常時の大連の町名……三
七月のうた……天三佛……三
川柳滿洲繁昌誌……石原青龍刀……四
滿洲句帖……高山峻峰……五
沙崗海水浴場……五
濱齊を貫く……平野博三……六
宿の女中さんは曰く……六
新建立營口楞嚴寺……八
あんない役……H・O・K……九
東部線散景……伊藤順三……九
旅行と觀照心……高山謹一……一〇
好羅針盤……關根四男吉……一〇
旅行の鍵……稻田和一……一一
旅、旅行、足袋、靴……水上頁……一一
はるぴんの初夏……非上麟二……一三
北滿洲の避暑地……西東……一三
船を抱く……デルタ……一四
埠頭視察者の質問……甲斐又雄……一四
平康里の朝（畫と文）……甲斐巳八郎……一五
滿洲の鄕土玩具……須知善一……一七
上海の歡樂場競犬……西田生……一八
文化の發達は旅行から……齋藤生……二〇
新京初夏は戲れる……K・H……二二
贋醫者……K……二二
ハルビンの噂……觀口明……二三
旅に抄ふ……大野斯文……二四
大連と馬車……柊縫子……二六
鐵鎖龍首山……山田潔……二六
蒙古地方の驛名……渡邊柳一郎……二七
旅行者の福音……鎌田正輝……二四
旅途にある日滿人融合……三角洲……二一
牽引力……二一

編輯のあとに

□このたび新に「旅行滿洲」を出す。主として內地よりの人々に滿洲への旅行趣味を與へ「滿洲」を印象づけんとするに外ならない。さて又、滿洲の人々に向つては、燈臺もと暗からざるやう、寸暇もあらば都邑を、勝地を、溫泉を、訪ねて戴き度いといふ意味から。

□奧地旅行の不安が除かれて交通路が次第に延びるにつれて隨所に景勝の地が發見され舊蹟が紹介されてゐる。北では鏡泊湖の雄大な景氣、奉山線の興城溫泉、熱河の承德離宮など埋つてゐた寶物が掘り出されたようなもんだ。今後も續々現はれて來よう、滿洲に觀光地難を喞つたのも昔話になる時期も遠くはあるまい。

□この雜誌の計畫成りて、出すなら初夏の旅行シーズンとありて早急、その道の人々に寄稿を依賴して得たるもの、余日なきにこの各篇を得た。寄稿家皆樣に感謝する次第である。

旅行滿洲 第一卷第一號

昭和九年六月十日印刷
昭和九年六月十一日發行

發行人 齋藤喜八
編輯人 林重生
印刷人 吾妻力松
印刷所 滿洲日報社
大連市伊勢町五四
發行所 ジヤパンツーリスト ビユーロー大連支部

隔月刊行

定價十五錢

改題の辭

本誌〝旅行滿洲〟も發刊以來既に五ヶ年を閱した。この間滿洲に於ける唯一の旅行雜誌として終始向上の一路を辿り得たことは、一重に大方御聲援の賜物である。

然るに今や、東亞大陸は昨日の舊殼を脫して劃期的形態を現じ來り、百般の事態また脈脈として新生面に躍動してわが國の大陸政策は堂々その步武を進めてゐる。

顧るに昭和六年七月、本誌の創刊以來、滿洲は幾度か社會情勢の變轉に遭遇した。この間に處して本誌も次第にその內容を充實して來たが、昨年末來皇軍の北支肅淸あり、本誌の使命も更にその範圍を擴大すべき事態となつた。茲に本誌は必然この四圍の新情勢に順應すべく、まづ從來の〝旅行滿洲〟を一層擴充し本號より〝觀光東亞〟と改題し以て國策的觀光事業に參與せんとするものである。

想ふに東亞觀光の事業たるや、一に平和の確立と東洋文化の復興に俟たねばならぬ。之が具現は東洋民族の協力によるもの、各民族は相倚らねばならぬ。相倚るものは相識る。相識らんが爲には東亞觀光の實踐に努力せねばならぬ。即ち東亞平和の促進こそは本誌終局の念願に他ならぬ。

茲に改題に際し本誌の抱負を明にし、併せて諸賢倍壽の御支援を希ふ次第である。

觀光東亞

第八卷 第一號 新年號 目次

中支那特輯號

巻頭論説 中支那旅行案内
・中支の思ひ出……片岡鐵兵
・杭州西湖……下村海南
冬の江南情景……後藤朝太郎
江南地誌漫筆……西村捨也
江南の別墅……蕭竹生
中支那の概念三角洲
日支と中支經濟界の變遷……塙雄太郎
中支のある農村……天野元之助
中支の稻と米……村上拾己
中支那で……
江南の正月……岩澤巖
中支點描……武田雪夫
中支の旅館と食物……市川房枝
中支の航空網……金世昇
中支那の交通を語る……赤澤生
沒落し行く抗日紙……日高萬里
中支の鐵路復興……井上剛
金針榮……內田完造
江南の黃昏……神尾茂
上海の映畫界……川喜多長政
揚子江の珍魚……木村重

内容見本

旅行雜誌　二月號目次　第十一卷　第二號

在滿邦人住居と冬の健康生活……澤島英太郎
寒地生活と健民……小西俊夫
温泉と厚生問題……秋月正一

長期戰下の實業教育……金崎賢
公社の國家的意義……村井藤十郎

旅行と空襲……竹田讓
冬とたたかふ鐵道……小川新次
……石崎市
……高原富次郎

戰時映畫の文化的意義
開拓地に於ける文化運動……柏崎武雄

句と歌
・冬の歌……高山眞二
・二月雜詠……松尾呂青

紀行
・名前談義……渡邊美知夫
・南京の戰跡……赤江橋祭吉

大興嶺踏査記……中村幸雄
大陸の花嫁女塾を語る……熊井竹代
動勞女性……品然ふみ
・滿洲と農……久保田寧二
……村……常松榮

小說
・洋襲……桜本捨三
・陽鬼……加藤秀造
・伶人……神戸悌

内容見本

滿洲の狩獵を語る

少年移民は唄ふ

移民地巡禮一千里【3】

特派記者　山田健二

城・子河移民團

魯迅先生と版畫

内山完造

大陸の溫泉巡り

滿洲北支衛生見學印象記

松武幸

ホントカキ

東井隆夢

満蒙文化協会ほか　刊〔大正九年～昭和一八年〕

満蒙　全121巻・別冊1

本誌は、旧植民地・満洲に関する基本的資料のひとつである。創刊当初より満鉄の庇護の下、満鉄調査部の研究成果を毎号掲載し、天野元之助、大塚令三、田中忠夫等の筆者が多数登場する。また、文学、言語、家族、宗教、考古学等、汎く「満蒙」に関する論文、翻訳を載せている。復刻にあたっては、『満蒙』の前身誌『満蒙之文化』をも含め、全二八一号を三期に分けて収録、刊行。

別　冊＝総目次・執筆者索引
推　薦＝石堂清倫・岡部牧夫・川村　湊・鈴木隆史・西村成雄・波多野太郎・丸山　昇
揃定価＝本体2、145、000円＋税
【第Ⅰ期】全31巻
〔第1巻～第31巻／大正9年～昭和2年〕
体　裁＝A4判・A5判・上製・総14、222頁
揃定価＝本体558、000円＋税
【第Ⅱ期】全46巻
〔第32巻～第77巻／昭和2年～昭和9年〕
体　裁＝A5判・上製・総19、784頁
揃定価＝本体792、000円＋税
【第Ⅲ期】全44巻・別冊1
〔第78巻～第121巻／昭和10年～昭和18年〕
体　裁＝A5判・上製・総20、004頁
揃定価＝本体795、000円＋税

満洲移住協会　編〔昭和一一年～昭和二〇年〕

拓け満蒙・新満洲・開拓　全23巻・別冊1

『拓け満蒙』が創刊された年の夏、広田内閣によって満洲移民が七大国策一四項目のなかに織り込まれ、拓務省が「二十カ年百万戸送出計画」をたてている。すなわち同誌は、この大量送出の推進という役割を負わされていた。それも、「分村移民方式」という具体策を積極的に提起していった。本復刻版は、『拓け満蒙』そしてその継続誌『新満洲』『開拓』全号を収録し、時局の進展に伴う満洲移民の意義と実態の変化を知ることのできる第一級資料である。

別　冊＝解説（岡部牧夫）・解題（小林弘二）・総目次
体　裁＝B5判・A5判・上製・総11、864頁
推　薦＝安孫子麟・池田浩士・川村　湊・君島和彦・田中　学
揃定価＝本体506、000円＋税

満洲開拓関係雑誌集成　全11巻・別冊1

「満洲国」で移民政策を担った満洲拓植公社等の機関誌を収録。満洲拓植公社員による論考、業務紹介等、公社員を対象に編集した雑誌『偕拓』、満洲移民に関する訓令・法令等を漏らさず収録した内部資料『開拓月報』、移民の同志的結束と自主的・実践的創造の場を任務とした第一次『開拓協和』、及び「開拓綜合指導誌」をめざした第二次『開拓協和』。「満洲開拓」の実態を明らかにし、満洲移民史の欠落を補うための重要資料。

別　冊＝解題（風間秀人）・総目次
体　裁＝A5判・B5判・上製・総5、798頁
推　薦＝蘭　信三・白木沢旭児・白取道博
揃定価＝本体220、000円＋税

国立公園協会　刊〔昭和四年～昭和一九年〕

國立公園　全12巻・別冊1

本書は、本多静六、田村剛、三好学、細川護立などにより昭和二年に設立された国立公園協会の機関誌である。昭和四年に創刊、太平洋戦争中の昭和一八年に『國土と健民』と改題されるが、昭和二三年『國立公園』の名で復刊し、今日に続く。国立公園の特質、保護や利用等の記事を通して国立公園の普及啓発に努めた。植民地をも含む国立公園の成立・運営とその意義、国立公園行政の全体像を捉える基本資料である。

別　冊＝解題（白幡洋三郎）・総目次・索引
体　裁＝B5判・上製・総5、568頁
推　薦＝小泉武栄、越澤　明、曽山　毅、西田正憲
揃定価＝本体312、000円＋税

植民地文化学会　編

近代日本と「満州国」

本書は、一九九二年から一九九六年まで五年間にわたり開催された、日本と中国の「被害と加害」の歴史を文化的側面から検証するシンポジウム「日本帝国主義と〈満州国〉の文化」の報告をまとめたものである。「満州国」研究者、文学研究者必携の一冊。

A5判・上製・592頁・本体6、000円＋税

植民地文化研究会（現・植民地文化学会）編

《満洲国》文化細目

本書は「満洲国」で出版された書籍四六〇点、同国居住者によって書かれ日本で出版された書籍一〇五点についての書誌情報（刊行年月日、発行者、頁数、定価、所蔵先など）と解題の集大成である。

A5判・上製・850頁・本体6、800円＋税

復刻版 旅行満洲

全26巻
別冊1

体　裁――B5判・上製・総約13、500頁
揃定価――本体650、000円＋税
別　冊――解説・総目次・索引（分売予価 本体3、000円＋税　ISBN 978-4-8350-7995-0）
解　説――孫 安石（神奈川大学教授）・高 媛（駒澤大学准教授）・
清水賢一郎（北海道大学教授）・田島奈都子（青梅市立美術館学芸員）
推　薦――荒山正彦（関西学院大学教授）・西原和海（文芸評論家）・三橋 勇（秀明大学教授）

配本	復刻版巻数	原本巻号数	原本発行年月	刊行・ISBN（頭に「978-4-」が入ります）	価格
第1回配本	第1巻・第2巻	第1巻第1号～第3巻第8号	昭和9年6月～11年9月	2016年12月 8350-7959-2	本体50、000円＋税
第2回配本	第3巻～第5巻	第3巻第9号～第4巻第9号	昭和11年10月～12年9月	2017年4月 8350-7962-2	本体75、000円＋税
第3回配本	第6巻～第8巻・別冊	第4巻第10号～第5巻第9号	昭和12年10月～13年9月	2017年8月 8350-7966-0	本体75、000円＋税
第4回配本	第9巻～第11巻	第5巻第10号～第6巻第9号	昭和13年10月～14年9月	2017年12月 8350-7971-4	本体75、000円＋税
第5回配本	第12巻～第14巻	第6巻第10号～第7巻第6号	昭和14年10月～15年6月	2018年4月 8350-7975-2	本体75、000円＋税
第6回配本	第15巻～第17巻	第7巻第7号～第8巻第5号	昭和15年7月～16年5月	2018年8月 8350-7979-0	本体75、000円＋税
第7回配本	第18巻～第20巻	第8巻第6号～第9巻第5号	昭和16年6月～17年5月	2018年12月 8350-7983-7	本体75、000円＋税
第8回配本	第21巻～第23巻	第9巻第6号～第10巻第5号	昭和17年6月～18年5月	2019年4月 8350-7987-5	本体75、000円＋税
第9回配本	第24巻～第26巻	第10巻第6号～第11巻第8号	昭和18年6月～19年8月	2019年8月 8350-7991-2	本体75、000円＋税

※第5巻第4号より『観光東亜』、第10巻第7号より『旅行雑誌』に改題。

※第1巻第3号、第2巻第6号、第3巻第1～3・6・7号、第11巻第6号は未収録です。

不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160-2-94084

表示価格はすべて税別

2016/11